様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２４０４

研究課題名（和文）ヨーロッパにおける地霊論の系譜と記憶の積層化に関する宗教社会史的研究

研究課題名（英文）Religious and socio-historic research on genealogy of Genius loci concept and accumulation of memory in Europe

研究代表者
立石　博高（Tateishi, Hirotaka）

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：００１３７０２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,900,000円

研究成果の概要（和文）：４年間の研究期間において、とくに重要な成果と言えるのは、スペインを中心とする現地研究者との段階的な交流と現地での合同調査、2度のワークショップを開催したことである。初年度にムルシア大学のグロリア・ラ・ペーニャ氏を招聘し、2年目にはマドリード市内、トレド、セゴビアにおいて研究課題に係る調査を現地研究者の協力をえて行ない、それらの成果を踏まえ、3年目にはさらなる実地調査と国際ワークショップを組み合わせた研究企画をスペインのマドリード及びムルシアで行なうことができた。4年目は新型コロナ禍のため、計画していた国際ワークショップを開催することはできなかったが、研究成果の公開に時間を費やすことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究計画の学術的意義は，ヨーロッパにおける地霊論の系譜と時代ごとの特質を跡づけつつ，地霊の形成過程・社会的機能を解明する、最初の国際的プロジェクトであったことであり、それをスペインの研究者との交流を積み重ねながら、次の研究段階への土台を築けたことにある。異なる出自を持つ国や民族、社会や文化が代わる代わる統治し，複数の記憶が積層する場を多層記憶的地点と定義し，記憶の積層化・集約化のメカニズム、巡礼や周年記念的祝祭，これらの地点に発生した紛争・暴動といった事件を地霊学の観点から再解釈することを通して、歴史社会、さらには現代社会を見直す視点を提供できた点は、本計画の社会的意義といえよう。

研究成果の概要（英文）：During the four-year research period, the most important achievements were the step-by-step exchanges with local researchers mainly in Spain, the joint research in the field, and the holding of two workshops. In the first year, we invited Mr. Gloria La Penha of Murcia University, and in the second year, we conducted research on subjects in Madrid, Toledo, and Segovia with the cooperation of local researchers. In the third year, a research project combining further field surveys and international workshops could be conducted in Madrid and Murcia, Spain. In the 4th year, due to the Covid 19 pandemic, we could not hold the planned international workshop, but we were able to spend time publishing the research results.

研究分野：西洋史

キーワード：地霊論　ゲニウス・ロキ　都市空間論　西洋史　文化遺産　思想史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

かつてマルクス主義史学（唯物史観）やその影響下に，わが国の戦後歴史学において牽引的役割を果たした土地制度史学（社会経済史）は，土地所有・土地の経営・土地を媒介とした人間関係や社会関係（荘園制，領主制，農奴制）を歴史の展開の根本要因と見なしてきた。1970 年代以降の歴史学の転回の結果，土地所有関係は数ある社会的関係の一つに後退し，人間と人間のつながり（社会的紐帯）や政治の作法（政治文化論），記憶と想起のあり方（記憶想起論）へと関心は移り，いまや歴史的考察はすべて，「文化の視座」（歴史文化学）から捉え直されつつある。近代主義的認識が内包していた「認識上の死角」を総ざらいし，政治→経済→社会→文化と，ぐるりと一巡する過程で得た歴史的認識のスペクトルの広がりを十分に踏まえたうえで，ここで再び人間と土地の関係に立ち戻るとき，人間が土地に対して抱く執着心，土地への情念ともいうべきものの存在に想到する。アラン・コルバンが提唱する感情の歴史学は，叙述史料に頻繁に登場しながら挿話的な扱いしか受けてこなかった感情描写に着目した。コルバンの感情史は，数量化など，史料操作に大きな壁を抱える主題でありながら，人間の歴史を感情抜きに語ることが孕む欺瞞や，感情が現に歴史を動かす重要な因子であるという明白な事実を無視してきたことへの痛烈な反省に端を発している。感情の歴史学は近年，社会学，心理学，哲学などの学際的な編制のもとに包括的な感情研究（Studies on Emotion）の一部門としての地歩を築きつつある（Handbook of Emotions. Guilford Press, 2008）。ここでの「感情の歴史学」は，感情の社会化，感情から社会行動に至るプロセスなど，感情と歴史社会を結びつける説明原理を模索している。本研究計画は，これら歴史学の認識上の革新と拡張を踏まえ，土地に対する人間の感情＝情念の社会的なあり方に分析のメスを入れる試みである。

２．研究の目的

本研究計画は，研究代表者である立石と 6 名の研究分担者とが 4 年間（H.23-H.26）にわたって行なってきた科研費基盤研究（A）「歴史認識の変容と文化遺産・景観の思想に関する比較研究」の成果に基づいて立案されたものである。同研究計画では，文化遺産という概念が成立した歴史的状況，文化遺産概念をめぐるヨーロッパと隣接文化圏との間の対立・交渉のプロセス，文化遺産の効果的な配置によって再定義される都市空間や都市改造構想との関係など，文化遺産をめぐる諸問題を歴史学の視点から徹底的に考察してきた。個別研究を積み上げ，その成果を国際ワークショップ（イラン，ポーランド，イスタンブル）で公表し，討議を重ねるなかで浮かび上がってきた問題こそが，前段で述べた感情史的文脈での「土地への情念」に関わる問題、すなわち文化遺産（動産）が配置される「場」，文化遺産（不動産）に集約される土地への記憶，文化遺産をめぐる紛争が助長する土地への情念，という人間の普遍的感情に関わる主題にほかならない。近年の感情研究の取組みは，これら文化遺産研究の課題を埋めるだけでなく，これをさらなる次元へと学問的に発展させうる可能性を秘めている。

とはいっても，文化遺産の歴史学と感情研究の接合は決して容易な作業ではない。この点で，方法論・認識論上のバイパスとなり得るものの第一が，建築史における空間研究の成果である。クリスティアン・ノルベルク・シュルツ（Christian Norberg-Schultz）は著書『実存・空間・建築』（鹿島出版会，原著：Existence, Space and Architecture. London 1971）のなかで，主体が環境との間に取り結ぶ空間認識のプロセスを，定位（オリエンテーション，方向感覚）という概念のもとに，空間知覚の体験として捉えようと試みた。その際，従来の数学的・物理的な定量的空間分析が捉えきれなかった人間と環境との情緒的関係を「実存的空間」という概念のもとに把握する方法を考究している。また，建築史・都市論を専門とするジョーセフ・リクワートは，都市の建設を人間が土地をわがものとする手段という観点から捉え直し，都市建設時の地割や方角決定，敷地の形状，都市の創建儀礼など，文化人類学的な問題設定からのアプローチを試みている（『まちのイデア―ローマと古代世界と都市の形の人間学』みすず書房，原著 1976 年）。第二のバイパスは，いわゆる地霊論である。ヨーロッパではすでに古代より，人間の土地に対する関わり方を社会化するうえで，土地に自律的な意志を認める地霊（ゲニウス・ロキ），すなわち土地に宿る霊の存在を想定してきた。人間の土地に対する働きかけは，この地霊との対話・交渉（コミュニケーション）のなかで行なわれ，交渉の失敗や地霊の意志を無視した土地利用・建築行為は，共同体に対して負の結果を招来するとして忌避された。地霊自体は一種のアニミズム的な宗教性を帯びているが，これを社会システム論的な観点から捉え直せば，人間社会の意志から自律的である地霊の存在は，紛争の最大要因である土地の領有について，共同体の内部で合意をはかるために不可欠の装置であると評価できる（地霊論については，上記のノルベルク・シュルツの研究〔Christian Norberg-Schulz,Genius Loci. Landschaft, Lebensraum, Baukunst, Klett-Cotta, 1982〕のほか，東京や日本の地霊論については建築史家鈴木博之の一連の著作・論考がある）。以上の背景・経緯から，本研究計画は，文化遺産研究の成果，感情研究の取組み，建築史的空間把握，地霊論の４つの成果・方法論をもとに，人間と土地の情念的関係を対象とする新たな歴史文化学（地霊の歴史文化学）を構築するための基盤研究として立案されたものである。

３．研究の方法

本研究「ヨーロッパにおける地霊論の系譜と記憶の積層化に関する宗教社会史的研究」では，上記の研究目的及び課題に沿って，研究代表者・研究分担者・連携研究者を以下の４つの研究班に配置して，効率の良い研究の遂行をはかる。

（1）研究班Ａ：ヨーロッパにおける地霊論の系譜と接合圏域との比較（統括＝篠原琢）本研究班は，ヨーロッパにおける思想・言説・表象としての地霊論の系譜を時系列に掘り起こし，これを接合圏域の地霊論と比較することを課題とする。ヨーロッパにおける地霊論のヒストリオグラフィを整理する作業は本研究計画遂行のための基盤構築にあたるものであり，関連する研究文献・史料・参考図書・図像資料（ゲニウス・ロキ碑など）を網羅的に入手することが不可欠となる。本研究班は下記の７名を主担当として配置するが，研究代表者・研究分担者・連携研究者の全員が，各自が専門とする地域について地霊論をめぐる研究史の総点検を行なうものとする。これらの土台構築を初年度を中心に行ない，２年目以降，研究班Ｂ・Ｃ・Ｄの個別研究と連動させながら，基礎データを取りまとめた地霊データベース（genius loci database）の構築を進めていく。

（2）研究班Ｂ：地霊（ゲニウス・ロキ）と空間馴化儀礼（統括＝千葉敏之）本研究班は，地霊形成のメカニズム，地霊と社会，地霊と宗教が取り結ぶ空間的関係という地霊論の原理の解明を課題とする。なかでも，地霊の形成過程とその空間的編制（神域，都市，国家など），地霊をめぐる空間馴化儀礼（地割，方角決定，敷地の形状，都市の創建儀礼，教会のアルファベット儀礼など），建築物と土地の情念的関係，の３点に焦点を絞る。この研究班の編成にあたっては，歴史学だけでなく，宗教学，建築史などの隣接科学からの視点を取り入れることに配慮した。連携研究者の阿部は建築学の立場から建築物と地霊論をめぐる論点を整理し，ヨーロッパにおける地霊的建築物のインデックスの作成を担当する。また「土地と建築物の連結」という点で注目される史料に，地霊の宿る土地の真上にテクストを添えた頑丈な石材を打ち立てた，碑文（inscriptions）がある。古代ローマのゲニウス・ロキ碑とも比較可能なこの史料類型については，論文「アヤソフィア・ワクフの一年」をはじめとする碑文研究の実績をもつ研究分担者林が主に担当する。

（3）研究班Ｃ：記憶の多層化・集約と多層的記憶地点への巡礼（統括＝立石博高）研究班Ｃ・Ｄは，２頁に記した第三の研究課題である「地霊の現象学」に関わる個別研究を担当する。研究班Ｃは，第一に多層記憶的地点の代表的都市を取り上げ，記憶の多層化と集約の実態を明らかにする。具体的には，ビザンツ，ノルマン，アンジュー，アラゴン，スペイン・ハプスブルク，スペイン・ブルボンなど，外来勢力の「支配の記憶」が積層するイタリアの都市ナポリ（北村），また中世キリスト教，ケルト人やローマ時代の歴史，イスラーム支配時代，キリスト教徒の再征服後のアルハーマ（ユダヤ教徒街区）など，その多層的記憶がスペイン国家の示す多様性のモデルとして創造されていったスペインの都市セゴビア（立石）が分析の対象となる。第二に，多層的記憶地点には巡礼を引き寄せ，周年記念などの記念行事が営まれる。その代表となるのが，死者の記憶が積層する墓地をめぐる追悼行為である。この主題については，アメリカ史を専門とする研究分担者金井が，とくに南北戦争の激戦地ゲティスバーグを取り上げて考察する。これは，大量の移民が既存の地霊を排除しながら新しい国家統合の地霊を形成していく移民国家の貴重な事例であり，移民の出身国での地霊が新たな土地で復元される（「ニュー」の付された都市の複製）という点でも興味深い事例研究となることが期待される。これに連動する形で注目されるのが，移民輩出国である帝国イギリスであり，これについてはイギリス近代の博物学を専門とする伊東が，世界に広がる植民地の地霊がいかに都市ロンドンにて蒐集・展示・解説されたかについて考察を行なう。

（4）研究班Ｄ：多層記憶的地点をめぐる紛争・暴動・統制（統括＝相馬保夫）研究班Ｄは，地霊が作用する多層記憶的地点をめぐる現象のうち，とくに地霊を利用した革命や暴動（篠原），独自の地霊イデオロギーを持つ全体主義政権の都市政策（相馬）など，地霊をめぐる相剋や地霊と暴力の関係を近現代史に力点を置いて考察する。これらの研究では，地霊という独自の視角の導入によって，従来の紛争・革命・暴動研究に新たな地平を拓くことも期待される。

（5）総括班：総括班は，各研究班の研究成果を回収し，〈地霊の歴史文化学〉の研究基盤の構築に結びつける役割を担う。具体的には，第一に，研究分担者や連携研究者の行なう研究の成果を，本研究計画の目的・課題に即して評価すること。第二に，研究分担者・連携研究者間の連絡をはかり，互いの研究成果を報告しあう場として毎年国内研究会を組織すること。この国内研究会は同時に，わが国における地霊の実地調査を兼ね，外国を主たる研究対象とするメンバーが，自己の研究の参照軸として日本の状況を把握することをも目的としている。第三に，研究の遂行に支障が生じた場合，研究計画の修正案を立てること。第四に，研究の進捗に応じて，国の内外から研究協力者を招き，本研究計画の情報面，学知面での補強・補完をはかること。第五に，４年間の全研究年度にわたり，多層記憶地点・地霊研究の対象として好適な都市（次頁にある通り，セゴビア，ナポリ，ロンドン）を会場として，現地研究者との国際ワークショップを組織すること，さらに最終年度には，国際シンポジウム（ロンドン）の企画・運営を，研究分担者，連携研究者，内外の研究協力者の協力を得ながら担当すること，以上である。

４．研究成果

（平成 29 年度）

計画初年度にあたる平成 29 年度は，まず 6 月 17 日に第 1 回国内研究会を東京外国語大学（学長室）にて開催し，本計画のメンバーで全体の研究スケジュールを確認し，個別の研究計画について各自報告を行なった。今年度は研究班Ａ・Ｂの活動を最優先とし，地霊に関する文献を広く渉猟しながら、研究の基盤作りを行なう方針を確認した。また，メンバーのうち 3 名（金井・立石・伊東）が、個別課題の遂行にあたって必要となる史料・碑文調査を現地で行なった。平成 31 年度にムルシア（セゴビアから変更）にて現地調査とワークショップを開催する準備のため、まず立石がムルシアに出張し、現地文書館及び現地研究者との打ち合わせを行なった。また、3 月にムルシアからムルシア大学のグロリア・ラ・ペーニャ氏（Gloria Lapena Gallego：la Universidad de Murcia）を招聘し、3 月 27 日に本学海外事情研究所にてワークショップ（Public space as a source of memories. The heritage of Madinat Mursiya through the walking-picture book）及び第 2 回国内研究会を開催するとともに、今年度の調査結果の報告を行なった。さらに、来年度に行なう予定のローマ（ナポリから変更）でのワークショップの準備を、分担者の北村が中心となって行なった。

（平成 30 年度）

本年度はまず、次年度にマドリードでの開催を計画している国際ワークショップに向けた準備を行なった。企画担当者である研究代表者と 1 名の研究分担者が 11 月にマドリードを訪問して現地担当者との間で交渉を進めるとともに、現地での史料・遺構調査を行なった。12 月には国内研究会を開催し、次年度以降、本研究計画に参加予定の小野寺拓也氏（ナチス研究）による報告と質疑応答を行った。

また 2 月には、研究代表者及び研究分担者 5 名が参加して、マドリード市内、トレド、セゴビアにおいて研究課題に係る現地調査（マドリードの都市の堆積と、都市景観の変容がテーマで、アラブ人要塞時代、11 世紀にはじまる中世市街区、スペイン帝国時代、ブルボン朝時代の都市発展）を共同で行なった。これにより、次年度に向けた準備を研究チーム全体で行なうことができ、また認識や論点を共有することができた。

とくにセゴビアでは、セゴビア市役所文化担当責任者であるクラウディア・デ・サントス女史、セゴビア市文書館館長ラファエル・カンタレーホ氏、同補佐イサベル・アルバレス女史、国立遠隔教育大学セゴビア校校長、応用経済学部教授ビクトル・ゴンサレス氏、同センター秘書エンリケ・ガリェーゴ氏、セゴビア市史クロニスタ（官選郷土史記録官）、理工科大学建築上級学校建築史元教授アントニオ・ルイス・エルナンド氏といった現地研究者や担当者の協力を得て、2 日間にわたり、地霊研究の格好の研究対象であるゼゴビア市内の遺構（キリスト教・ユダヤ教・イスラーム教）と近郊の採石場（エル・エスコリアル宮をはじめ、多くの歴史建造物にスレート材を提供してきた場所）を訪問し、担当者から様々な話を聞く貴重な機会を得た。

当初、次年度のワークショップはローマでの開催を計画し、そのための準備を現地の提携研究者との間で進める予定であったが、スケジュール調整の不調のため、開催先を変更する必要が生じた。そのため、研究代表者を中心に、マドリードを開催地とする計画を練り上げ、現地研究者として本研究計画のパートナーとして相応しい提携研究者を探したところ、ムルシア出身の美術史研究者ホアキン・マルティネス・ピノ氏（スペイン放送大学専任講師）から快諾を得ることができ、そのための調整を進めている。また、2 月に地霊論の格好の対象都市であるセゴビアやトレドでの合同調査を通じ、調査が大いに進捗し、研究チームの中で情報と論点を共有することができた。したがって、開催地の変更はあったものの、研究としてはおおむね順調に進展しているものと判断できる。

（令和元年度）

3 年目にあたる令和元年度は、過去 2 年間の研究成果をもとに、実地調査と国際ワークショップを組み合わせた企画をスペインのマドリード及びムルシア（9 月 11 日～15 日）で行なった。マドリード放送大学では、Genius loci and accumulation of memories と題する国際会議を組織し、“Recapturing Jewish sites inCzech Republic and Central Europe”と題する報告を行った。ムルシア、シエサでは主にイスラーム期の遺構と現代におけるその表象に焦点をあてて調査を行った。考古学調査については、現地で調査を実行しているフリオ・ナバーロ博士のレクチャーを受けた。カルタヘーナでは、ローマ期の遺構が、現在の都市の記憶の中核に位置付けられつつある実態を確認した。ムルシアでのイスラーム期の遺構とカルタヘーナでのローマ期の遺構の調査実態、文化資産としての活用について、比較の視点が得られた。過去 2 年間の研究成果を踏まえ、マドリードで国際ワークショップを開催し、研究成果を問うとともに、スペインの研究者との間で有益な意見交換を交わすことができた。また、ムルシア、カルタヘナといった都市での遺構や博物館での実地調査では、現地の責任者による詳細なレクチャーを受けつつ、意見交換を行うとともに、本研究計画のメンバーで多くの認識を共有することができた。2020 年 1 月以降は新型コロナ蔓延のため、予定していた国内研究会を開催することはできなかったが、各自が研究成果を分析し、各種媒体で公表することができた。

（令和 2 年度）

本研究計画の最終年度に当たる令和 2 年度には、その成果を総括するための国際ワークショップを予定していたが、新型コロナの蔓延を受け、当初計画通りの実施が困難な状況になったため、1 年間の期間延長を申請した。繰越年度である令和 3 年度には、コロナ禍に伴う世界情勢を注視しながら代表者・分担者がこまめに連絡を取り合う一方、それぞれの研究を成果にまとめつつ、海外調査・合同現地調査・研究会に向けた準備を進めた。しかしながら、コロナ禍での海外渡航、現地での調査・研究会の開催は依然として難しく、断念せざるを得なかった。そのため、計画を変更して、各自の研究成果の取りまとめる作業を進めることを優先する一方、令和 4 年 1 月 22 日に代表者・立石による研究成果をめぐるオンライン合評会を上智大学の内村俊太氏をゲストに招き、国内研究会として開催した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計35件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 篠原　琢	４．巻 42号
２．論文標題 書評・川喜田敦子著、『東欧からのドイツ人の追放　20世紀の住民移動の歴史のなかで』（白水社、2019）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『東欧史研究』	６．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 篠原　琢	４．巻 22号
２．論文標題 書評・巽由樹子著、『ツァーリと大衆　近代ロシアの読書の社会史』（東京大学出版会、2019）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『クアドランテ』（東京外国語大学）	６．最初と最後の頁 99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 篠原　琢	４．巻 116号
２．論文標題 「中央ヨーロッパの食卓、チェコの食卓」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 vesta（味の素食の文化センター）	６．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 久米順子	４．巻 20
２．論文標題 「ベアトゥス写本研究の現在：近年の研究成果に照らして」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』	６．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久米順子	4．巻 11
2．論文標題 新刊紹介 F. J. MORENO MARTIN (ed.), El franquismo y la apropiacion del pasado. El uso de la historia, de la arqueologia y de la historia del arte para la legitimacion de la dictadura, Madrid, Editorial Pablo Iglesias, 2017	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『西洋中世研究』	6．最初と最後の頁 183-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久米順子	4．巻 11
2．論文標題 新刊紹介J. CASTANO (ed.), ?Una Sefarad inventada? Los problemas de interpretacion de los restos materiales de los judios en Espana, Barcelona, Herder, 2017	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『西洋中世研究』	6．最初と最後の頁 169-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 682
2．論文標題 「ファシスト・インターナショナル」―グローバル・ヒストリーとしてのファシズム 1	5．発行年 2019年
3．雑誌名 みすず	6．最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 688
2．論文標題 「ファシスト・インターナショナル」―グローバル・ヒストリーとしてのファシズム 2	5．発行年 2019年
3．雑誌名 みすず	6．最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也，西山暁義	4．巻 22
2．論文標題 占領地からのラブレター―ベルギー人少女からドイツ人兵士への手紙（1）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 クァドランテ	6．最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也，西山暁義	4．巻 54
2．論文標題 はじめに（シンポジウム「ヴァイマール100年―ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ―」）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ドイツ研究	6．最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也，西山暁義	4．巻 54
2．論文標題 （翻訳）ベンヤミン・ツィーマン「100年後のヴァイマール共和国―歴史化と現在化のはざまで」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ドイツ研究	6．最初と最後の頁 6-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 11
2．論文標題 過去の人びとの手紙を読むということ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 pieria	6．最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 128（6）
2．論文標題 （新刊紹介）ジェイムズ・Q・ウィットマン、西川美樹訳『ヒトラーのモデルはアメリカだった―法システムによる「純血の追求」』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 855
2．論文標題 （書評）清水雅大『文化の枢軸ー戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 107-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 12
2．論文標題 （書評）中村江里『戦争とトラウマ―不可視化された日本兵の戦争神経症』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同時代史研究	6．最初と最後の頁 100-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺拓也	4．巻 80(2)
2．論文標題 （書評）山室信一ほか編『われわれはどんな「世界」を生きているのか―来るべき人文学のために』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 史苑	6．最初と最後の頁 193-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 5
2．論文標題 感情史の萌芽と心理学--ホイジンガとフェーヴル	5．発行年 2020年
3．雑誌名 エモーション・スタディーズ	6．最初と最後の頁 in print
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 269
2．論文標題 （書評）並松信久『農の科学史--イギリス「所領知」の革新と制度化』（名古屋大学出版会、2016年）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 22
2．論文標題 犬になるということ--（書評）大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』（勉生出版、2019年）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 クァドランテ	6．最初と最後の頁 129-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 24
2．論文標題 イギリスにおける動物福祉の歴史--現代日本の視点から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 動物観研究	6．最初と最後の頁 9月12日
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takashi Ito	4．巻 134
2．論文標題 Review of Gary Bruce, Through the Lion Gate: A History of the Berlin Zoo (Oxford: Oxford University Press, 2017)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 English Historical Review	6．最初と最後の頁 1328-1330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/ehr/cez254	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 300
2．論文標題 ミカドキジの命名、採集、および保全繁殖の歴史に関する基礎研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 専修大学人文科学研究所月報	6．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34360/00010083	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 11
2．論文標題 現代のプロメテウス	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ピエリア	6．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kayoko Hayashi	4．巻 51
2．論文標題 Ayasofya Vakfi'nda Bir Yil: 1667	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Jounal of Turkish Studies	6．最初と最後の頁 343-362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林佳世子	4．巻 116
2．論文標題 トルコ地域における調味料と食	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Vesta	6．最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金井光太朗	4．巻 34号
2．論文標題 世界市民フランクリンに見る対抗文化としてのコスモポリタニズム	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本　18世紀学会年報	6．最初と最後の頁 28-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Toshiyuki Chiba	4．巻 9
2．論文標題 Replicated Jerusalem Architectural Copies of Holy Sepulchre in Medieval Europe	5．発行年 2019年
3．雑誌名 西洋中世史研究	6．最初と最後の頁 41-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林佳世子	4．巻 35
2．論文標題 イスタンブル・聖ソフィアでの祈り	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンジャリ	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金井光太朗	4．巻 33
2．論文標題 世界市民フランクリンに見る対抗文化としてのコスモポリタニズム	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本18世紀学会年報	6．最初と最後の頁 forthcoming
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊東剛史	4．巻 291
2．論文標題 犬吠埼灯台から考える「科学のリロケーション」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 専修大学人文科学研究所月報	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takashi Ito	4．巻 109
2．論文標題 Review of Daniel E. Bender, The Animal Game: Searching for Wildness at the American Zoo, Cambridge, MA: Harvard University, 2017	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Isis	6．最初と最後の頁 forthcoming
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 篠原　琢	4．巻 976
2．論文標題 主権国家再考（2018年度歴史学研究会大会〈合同部会〉）へのコメント	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 186-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 篠原　琢	4．巻 41
2．論文標題 橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』（ミネルヴァ書房）への書評	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東欧史研究	6．最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相馬保夫	4．巻 976
2．論文標題 2018年度歴史学研究会大会 近代史部会コメント1	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 122-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北村暁夫	4．巻 46
2．論文標題 南米のイタリア移民ーブラジルとアルゼンチンを中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 立教大学ラテンアメリカ研究所報	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　5件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 久米順子
2．発表標題 Miles christiとしての聖ヤコブ像にみる排除と包摂:中世から近世のイスパニア世界における「サンティアゴ・マタモロス」をめぐって
3．学会等名 「16世紀イスパニア世界における帝国的交通空間と「境界的」 美術の形成 」研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Junko Kume
２．発表標題 Algo mas que Zen
３．学会等名 Ponencia Magistral del Ciclo Encuentros Internacionales, Universidad de Sevilla（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野寺拓也，西山暁義
２．発表標題 ヴァイマール100年―ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ
３．学会等名 第35回日本ドイツ学会大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野寺拓也
２．発表標題 男性史研究は「行き詰まって」いるのか？
３．学会等名 総合文化研究所共催講演会 閉ざされた身体／流れ出す身体 モデルネの身体表象（ボディ・イメージ）をめぐって（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ito
２．発表標題 The Logistics of Bird Collecting in the Age of Empires: Walter Goodfellow’s Expedition to Taiwan, New Guinea and the Philippines
３．学会等名 International Workshop on Logistical Nature: Trade, Traffics and Transformations in Natural History Collecting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ito
２．発表標題 The Honour of Naming a New Species: Emotional Communites of Naturalists in the Early Twentieth Century,
３．学会等名 Colloquium, Centre for the History of Emotions, Max Plank Institute for Human Development（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊東剛史
２．発表標題 （コメンテイター）『犬からみた人類史』を読んで，書評会：大石高典、近藤祉秋、池田光穂編『犬からみた人類史』（勉誠出版、2019年）
３．学会等名 東京外国語大学海外事情研究所
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ito
２．発表標題 Building the Ark in Modern Rome: Animals and Architecture in Post-Regency London
３．学会等名 International Workshop on Genius Loci and Accumulation of Memories（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ito
２．発表標題 The Legacy of Enlightenment Science?: The Identification and Identity of Animal Species in the Age of Empires
３．学会等名 International Conference on Enlightenment and Identity（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ito
２．発表標題 The Naming of the Mikado Pheasant: Ornithology, Aviculture and Zoogeography in the Age of Empires
３．学会等名 International Society for the History, Philosophy and Social Studies of Biology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Toshiyuki Chiba
２．発表標題 Replicated Jerusalem-Architectural Copies of Holy Sepulchre in Medieval Europe
３．学会等名 The 10 th Japanese-Korean Symposium on Medieval History of Europe　2019年8月21日（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 千葉敏之
２．発表標題 地霊論の歴史学的射程 ―歴史学における〈土地〉への情念の定位
３．学会等名 印刷博物館（第1回樺塾）
４．発表年 2018年

１．発表者名 金井光太朗
２．発表標題 市民フランクリンのコスモポリタニズム：共和主義、パトリ、世界市民
３．学会等名 日本18世紀学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Taku Shinohara
２．発表標題 Europe as a canon and obsession for Japanese society
３．学会等名 Europea Research Day（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 篠原　琢
２．発表標題 ベーメンにおける純粋主義：建築遺産と歴史意識
３．学会等名 東欧史研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計21件

１．著者名 篠原　琢	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 340
３．書名 『論点・西洋史学』（「帝国」を文旦執筆）	

１．著者名 長谷川貴彦、大黒俊二、安村直己、若尾政希、長谷川まゆ帆、キャロライン・スティードマン、横山百合子、小野寺拓也、松井康浩	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 273
３．書名 エゴ・ドキュメントの歴史学	

1．著者名 板橋拓己、小野寺拓也（監訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 160
3．書名 ナチズムは再来するのか?:民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓	

1．著者名 伊東剛史	4．発行年 2020年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 印刷中
3．書名 ロンドン動物学会と動物学の制度化--専門分科の分岐点：大野誠編『近代イギリス科学の社会史』	

1．著者名 Takashi Ito	4．発行年 2019年
2．出版社 McGill-Queen's University Press	5．総ページ数 27-48
3．書名 Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo, in Tracy McDonald and Dan Vandersommers (eds) Zoo studies: a new humanities	

1．著者名 Takashi Ito	4．発行年 2020年
2．出版社 Boydell & Brewer / Royal Historical Society	5．総ページ数 226
3．書名 London Zoo and the Victorians, 1828-1859, paperback edition	

１．著者名 立石博高	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 272
３．書名 歴史のなかのカタルーニャ―史実化していく「神話」の背景	

１．著者名 林佳世子	４．発行年 2019年
２．出版社 八旗文化	５．総ページ数 431
３．書名 鄂圖曼帝國五百年的和平：跳脱土耳其視角的非伊斯蘭帝國	

１．著者名 千葉敏之、大塚修、稲葉穣、松浦史明、飯山知保	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 304
３．書名 歴史の転換期４　1187年　巨大信仰圏の出現	

１．著者名 千葉敏之	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 forthcoming
３．書名 歴史の転換期4 1187年　巨大信仰圏の出現（総論および第4章・5章を担当）	

１．著者名 千葉敏之	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 forthcoming
３．書名 歴史の転換期5 1348年 気候変動と生存危機（総論を担当）	

１．著者名 北村暁夫	４．発行年 2018年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 イタリア史10講	

１．著者名 北村暁夫	４．発行年 2018年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 259(212-259)
３．書名 歴史の転換期第9巻　1861年　改革と試練の時代	

１．著者名 立石博高	４．発行年 2018年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 251
３．書名 スペイン帝国と複合君主政	

１．著者名 Takashi Ito	４．発行年 2018年
２．出版社 McGill-Queen's University Press	５．総ページ数 forthcoming
３．書名 Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo', in Tracy McDonald and Dan Vandersommers (eds),Zoo Studies: A New Humanities, Montreal	

１．著者名 立石博高	４．発行年 2018年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 264
３．書名 スペイン帝国と複合君主政	

１．著者名 高橋 慎一朗、千葉 敏之	４．発行年 2017年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 256
３．書名 移動者の中世	

１．著者名 木村 靖二、岸本 美緒、小松 久男	４．発行年 2017年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 576
３．書名 詳説世界史研究	

1．著者名 小田中直樹、帆刈浩之	4．発行年 2017年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 352
3．書名 世界史／いま、ここから	

1．著者名 北村暁夫	4．発行年 2018年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 未定
3．書名 歴史の転換期第9巻　1861年　改革と試練の時代	

1．著者名 Tracy McDonald and Dan Vandersommers (eds)	4．発行年 2018年
2．出版社 McGill-Queen's University Press	5．総ページ数 未定
3．書名 Zoo Studies: A New Humanities, Montreal	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	北村　暁夫 (Kitamura Akeo) (00186264)	日本女子大学・文学部・教授 (32670)	
研究分担者	伊東　剛史 (Ito Takasi) (10611080)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	篠原　琢 (Shinohara Taku) (20251564)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	千葉　敏之 (Chiba Toshiyuki) (20345242)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	小野寺　拓也 (Onodera Takuya) (20708193)	東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師 (12603)	
研究分担者	林　佳世子 (Hayashi Kayoko) (30208615)	東京外国語大学・その他部局等・学長 (12603)	
研究分担者	金井　光太朗 (Kanai Kotaro) (40143523)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	久米　順子 (Kume Junko) (60570645)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	相馬　保夫 (Soma Yasuo) (90206673)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スペイン	Centro de la UNED en Segovia	la Facultad de Derecho de la UNED		